Monthly Report

SENDAI UNIV. PUBLIC RELATIONS

Vol.179 / 2021.MAR (月1回発行)

588名の学生が旅立ち/令和2年度卒業式/コロナ禍で 予防対策徹底



体育学科総代・加藤遥さん

「令和2年度第51回卒業証書・学位記授与式並びに第22回大学院学位授与式」は3月13日(土)、学内の第5体育館で行われ、体育学部578名(うち、体育学科292名、健康福祉学科99名、運動栄養学科85名、スポーツ情報マスメディア学科43名、現代武道学科45名、子ども運動教育学科14名)の卒業生と大学院10名の修了生が本学を巣立ちました。

式はコロナウイルス感染予防の対策から、学生と関係教職員のみで執り行いました。会場は換気に十分気を遣い、進行面でも例年の式次第を大幅に見直し所要時間45分間と短縮しました。表彰関係は理事長特別賞に、第23回デフリンピック(トルコ・サムスン大会)水泳男子日本代表の星泰雅さん(体育4年)と、ボートの全日本インカレで男子エイトを制した漕艇部のエイトクルーが輝きました。

式典のもようは仙台大学公式YouTubeチャンネルでLIVE配信されました(約1週間の配信予定)。

〈学長式辞要約・遠藤保雄〉

日本は少子高齢化の時代を迎え、子どもの数が少なくなる中、皆さんを含め日本国民の平均寿命は百歳に達する時代に入りつつあり、これから社会の荒波に乗り出そうとする皆さんにとって、80年間にも及ぶ活躍と多くの課題に取り組むことが待ち受けており、そこで求められるのは「挑戦」である。

ここで、「遅咲きの力士」の挑戦の話に触れておきたい。2017年に誕生した第72代横綱は「稀勢の里」である。「稀勢の里」関の横綱への道のりは歴代の横綱と異なり、苦難の連続であった。力士としての初めての優勝は初土俵を踏んでから実に89場所、20年余を費やした。2011年に大関に昇進した後の横綱への挑戦も6年間という永きに亘った。だから、人呼んで「遅咲きの力士」

〈目 次〉

・588名の学生が旅立ち/令和2年度卒業式/ コロナ禍で予防対策徹底	1 • 2
・2020→2021 ~VUCAの時代を生きる私た ち~	3
・日本幼児体育学会第16回大会を終えて	4
・聖和学園高校とタッグ/スポーツで人材 育成 ・学生たち学会発表続々/林研究室	5
・スポーツと福祉スクラム/体育大学で学 ぶ魅力 ・オンラインでも運動指導てきぱき/ 学 生たち実習に取り組む	6
・「令和2年度 介護実習・社会福祉援助技 術現場実習 教育懇談会」を開催しました ・「日本コーチング学会」において、片岡 悠紀講師らの研究チームが令和2年度日本 コーチング学会奨励賞を受賞	7
・仙台大学クリケットプロジェクト・2021 練習会を開催	8
・芝草通信 NO. 23	9
「高校スポーツの安全を守る」Vol.35令和2年度「最終講義」を開催	10 ~ 14

学生の活躍や、取り組みなどをご 存知でしたら広報室までお寄せく ださい。

Monthly Reportで紹介する他、 報道機関にも旬な話題を提供して 参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

Monthly Report 1 Vol.179 / 2021 MAR.



といわれた。ただし、この遅咲きの時に、彼が挑んだ言葉を引用しよう。「横綱を目指す上で、まず骨格と筋肉を研究した」また相撲を取る時には「相手の呼吸や気を読むことや場をつかむ研究」をした。「考えることが相撲には必要」「何度も考えて、考え抜いて、横綱」に挑んだ。

入門後、厳しく肉体の限界が求められる日々の稽古の中で、彼は本能的に、まず、相撲という身体活動の土台となる体の構造をスポーツ科学の視点から学ぶことに挑み、次に、相撲という競技スポーツに臨む際、スポーツ心理学的な目で相手を分析し戦いに臨んだ。そこにあったのは「挑戦」という不屈の取り組みではないか。

今、横綱稀勢の里は、荒磯親方として小さな相撲部屋を持ち後進を育てる傍ら、相撲協会の広報も担当している。そんな親方が、また、新たな言葉を口にした。「自分を高めるため大学院に入学した」、「研究する、考えつづける力が、自分を支えてきた」とサラリと新たな「挑戦」の弁を述べている。

スポーツが好きで体育・スポーツ健康科学を学び、これから社会への旅立とうとしている皆さんと「挑戦」について一緒に考える機会になればと思う。

〈謝辞・廣谷姫奈さん、現代武道4年〉

春から進む道は、それぞれ違いますが各所で新たな道を切り開きます。楽しいことや嬉しいことばかりではなく、悩むこともあるかと思いますが、本学で過ごした時間や学んだことを思い出し、一歩ずつ進んでいきたいと思います。















2020→2021 ~VUCAの時代を生きる私たち~

体育学部体育学科コーチングコース 助教 加畑 碧

昨年4月より助教として着任しました加畑碧です。新体操とスポーツ心理学を専門としています。大学院を修了してすぐに着任させていただいたので、特に授業に関して私にできるだろうかと不安を抱えながら、目の前のことに精一杯取り組んできた1年間でした。授業前は非常に緊張していたことが懐かしく感じます。おそらく来年度も緊張します…。

2020年は例年に比べかなりストレスの多い1年間だったのではないでしょうか。2021年も、2019年のような生活に戻るとは考えにくく、多少「新しい生活様式」に慣れはあるものの心や身体にとっては気付かぬうちにもストレスが多くかかることが予測されます。それではどのようにこのストレスをうまくマネジメントできるでしょうか。少し話はそれますが、私の修士論文のテーマは「スポーツ選手の主体的な取り組みを促進させ



る映像フィードバックと練習日誌の活用」でした。競技スポーツをやっている方は、自分の動画を見たり、練習日誌を記入していたりしていますか?この修士論文は、特に練習日誌の記入が「思考の外化」を促し、客観的に自分の状況を捉えることで、現在の課題の把握や次の練習での目標設定などが可能になるという内容でした。

この内容は日常生活にも活かすことができると思います。日記に現在のストレスや自分の気持ちを記入することで、今の自分にとって何が起きていているのかを客観的に見ることができるようになり、何が問題でどうすれば良いかの方法を考える手助けになります。そうすることで、ストレスフルな状況にもうまく対応することができていくようになっていくと思います。もちろん、日記が全てを解決してくれるわけではないですが…皆さんもよかったら、試してみてくださいね!

みなさんにとって(私にとっても)2020年は、記憶に残る一年間だったと思います。私にとっては、社会人として、そして仙台大学の教員としてのスタートの1年だったというだけでも鮮烈ですが、コロナ禍という特殊で異様な雰囲気の中で過ごした春から初夏がやはり強く印象に残っています。大変なことももちろん多くありましたが、それ以上に、授業を通してどんなことを伝えようか?とか、どうしたらこの概念は皆に伝わるだろうか?とか色々試行錯誤しながらも取り組んだことはとても楽しく、有意義でした。また、途中自粛期間などもあり、イレギュラーではありましたが、1年間、新体操競技部のコーチとして部活動に関わり、目標に向かって努力する部員と過ごした時間もとても貴重なものでした。新しいコーチとして何もわからなかった時から、部を率いてきてくれた4年生の門出を見送ることはとても感慨深いです。

1年間を振り返って、仙台大学で過ごしたこの1年は、とてもエネルギッシュで楽しかったなと思います。山あり谷ありながらも、このような環境で仕事をさせていただけていることにただただ感謝しております。

さて、2021年度が始まろうとしています。引き続き先行きの見えない世の中ですが、どのような一年になるでしょうか。そのなかで私たちはどのように過ごしていくことができるでしょうか。

とにもかくにも心身ともに健康に過ごしていきたいところですね!



仙台大学新体操演技発表会



全日本新体操選手権大会 (右端)



日本幼児体育学会第16回大会を終えて

大会長 原田健次 教授 (同学会5期会長)

3月6・7日仙台大学において、日本幼児体育学会第16回大会が開催されました。本学会は、幼児体育に関する科学的な理論と実践の両立を目指すことにより、国際的・学際的ならびに学術的研究の進歩と発展を基に、理論的裏付けによる実践的指導の普及・振興を図ることを目的として設立され、今回の学会大会で16回目を迎えます。

本大会は当初、昨年8月に仙台大学おいて行われる予定でしたが、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、国内の蔓延防止や安全確保の観点から、延期にさせていただいていただきました。そして、より多くの幼児体育研究者および幼児体育指導者、保育・教育関係者の方々を東北に招いて、研究成果のご発表や話題提供、有益な教育・研究の情報交換と親睦の場の提供をと準備を進めていましたが、残念ながらオンライン開催となりました。

大会のテーマは「運動あそびを通して、すべての子どもに幸せを届けよう!」です。基調講演は「今一度、幼児体育について考える」と題して馬場桂一郎先生(大阪信愛学院短期大学名誉教授)、特別講演は「体育系大学に、なぜ、就学前児童を対象とする人材を育成する学科を設立したか」と題して朴澤泰治理事長、東北発信の講話及びシンポジウムでは、東日本大震災から10年目の節目を迎える「東北からの発信」として、皆様と共に、すべての子どもに幸せを届ける「子ども支援」について考究することができました。

また、研究発表は22題、幼児体育研究者・実践者から子ども支援に関わる多くの方から発表をいただきました。 参加者は90人の登録をいただき参加していただきました。オンライン開催のため、盛んな質疑応答はなかなかでき ませんでしたが、参加者の方々に、すべての子どもに幸せを届けるための良き知恵や研究知見を提供できたのでは ないかと考えます。

今回は、緊急避難的にオンラインよる学会の開催を行いましたが、実際に行ってみるとメリットもあるかと思いました。今後は従来の学会運営やオンライン開催の両方のメリットを取り入れながら行われる新しいかたちの学会が模索されていくのではないかと考えます。

最後になりましたが本大会の開催にあたっては宮城県教育委員会、一般社団法人宮城県保育協議会からの後援をいただき、多くの協賛企業や関係団体からご支援・ご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。





聖和学園高校とタッグ/スポーツで人材育成

本学は聖和学園高等学校と高大連携協定を結びました。

締結式は3月5日(金)、仙台市若林区の聖和学園高等学校薬師堂キャンパスで行われました。本学側からは学校法人朴沢学園理事長である朴澤泰治学事顧問と遠藤保雄学長が出席。遠藤学長は「(この協定によって高校時の)早くから体育・スポーツ健康科学を学んでいただき、本学と合わせた7年教育で優秀な人材が育ってほしい」と呼び掛けました。朴澤理事長は「お互いに良いところを共有しあって、一人でも多くの良い人材を育成できる大きなチャンスである」とタッグを組む意義を強調しました。

一方、聖和学園側の鈴木繁雄理事長は「早くから高度なスポーツ 教育の一端を知ることができることは生徒にとって大きな成長につ ながります」、庄子英利校長も「将来を見据えた子どもたちを高校 の段階から協力を得て育てていきたい」と語り、共に本学への期待 感をにじませました。

この協定は学校教育の振興並びに地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的としています。



左から本学側の朴澤理事長・学事顧問と遠藤学長、聖和学園側の庄子校長と鈴木理事長

学生たち学会発表続々/林研究室





林直樹研究室(准教授、コーチング・スポーツバイオメカニクスなど)で学ぶゼミ生たちの学会発表が相次ぎました。

4年生1人、3年生7人のほかに、林先生がバドミントン部監督でもあることからバドミントン部アナリスト2人 (スポーツ情報サポート研究会所属)は3月6、7の両日、日本バドミントン学会、日本スポーツリハビリテーション 学会に参加し、オンライン形式で研究成果を発表しました。

発表は10分間。その後には3分間の質疑応答もあり、全員そつなくこなしました。林研究室では、3年時に共同研究での学会発表、4年時で作成した卒業論文の学会発表を必須としています。

学会と発表者・テーマは次の通り。

3月6日(土) 日本バドミントン学会

「バドミントン・男子ダブルスにおけるレシーブの重要性」

塩沼直希、山口将史、玉手郁奈、本間雄大(体育3年)

「バドミントン・左利き選手が決められているコースを探る」

舘田悠汰、前田陽向、武藤大地(体育3年)

「バドミントン競技における攻撃・守備のスタッツ考案」

須田翔大 (スポーツ情報マスメディア2年)

「仙台大学バドミントン部専属アナライジングチーム活動報告」

佐藤美咲 (スポーツ情報マスメディア1年)

3月7日(日) 日本スポーツリハビリテーション学会

「大学軟式野球におけるスイングと打球飛距離の関係性~軟式野球に「フライボール革命」が応用できるかの検証 ~」

梅津和真(体育4年)

<報告:林直樹准教授>



スポーツと福祉スクラム/体育大学で学ぶ魅力

スポーツと福祉? 大いに関係あります。

健康福祉学科は、スポーツ、レクリエーションといった身体的な機能を福祉にどう活かすことが可能かを教えてくれます。もちろん福祉の専門性についても学べます。体育系大学ならではの福祉へのアプローチができるので、とてもユニーク。また、部活動が活発ですので人間力も磨かれます。つまり体育で培う力を福祉に生かしていくわけです。

現在、学生たち(健康福祉学科3年生)は社会福祉施設で現場実習中。仙台大学での学びについて聞いてみました。

「部活での経験を生かして粘り強く頑張りたい」(山田琉成さん)

「現場での実習の中で知識と技術が身についているため、この経験を実習後にも活かせるようにしていきたい」(遠藤裕里さん)

「実習先は知的障害のある人達が利用されている。レクリエーション部に 所属しているため、利用者の特性にあったレクリエーションを提供した い」(倉本遼太さん)

「コロナ禍という状況下での困りごとやニーズについても理解を深めていきたい」(西村岳さん)

「地元の福祉政策や歴史について聞き込み調査やプレゼーションを通して 以前より理解を深めることが出来た。この体験を実習後にも活かせるように していきたい」(滝野虎白さん)

<報告:健康福祉学科>



現場実習先の福島県内の病院で、社会福祉 士からケースの説明を直に受ける



退院援助に向け、看護師、社会福祉士と共 にカンファレンスに参加し今後の方向性を 確認する

オンラインでも運動指導できぱき/ 学生たち実習に取り組む



レクリエーション指導



筋力トレーニング指導



ストレッチ指導

本学が取り組む健康づくり運動サポーター事業の一環で、健康づくり運動支援班は令和3年2月15日(月)、オンライン形式による運動指導実習を行いました。本年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため活動先が大幅に減少。大学と柴田町の集会所を繋ぎ、町民に対して運動指導をおこなう機会も奪われてしまいました。

しかし、本学内で養成担当の教職員が「参加者」役となり実施。実習に参加した2人の学生は画面に映し出された「参加者」に健康づくりに向けたいろいろな運動を丁寧に指導しました。長谷川麗央さん(健康福祉3年)は「オンライン運動指導をやってみて参加者への声かけなど新たな発見がたくさんあった。今後の指導に活かしていきたい」、國分恵理さん(運動栄養3年)は「高齢者はオンラインを繋ぐ難しさもあるが、そういった面も含め改善し健康づくり運動を発信していきたい」と話してくれました。

指導した小池和幸教授は「オンライン運動指導では、声の大きさや話すスピードなどより意識する必要がある。 よりよい運動教室実施のため積極的にチャレンジしてほしい」と総括しアドバイスを送りました。

新年度の実習はオンラインと現場を併用する計画です。運動指導者養成と人々の健康づくりに貢献できる人材を 養成してまいります。

<報告:健康づくり運動支援班>



「令和2年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」を開催しました





3月3日(水)14時30分より、オンラインにて、「令和2年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」を開催しました。

この教育懇談会は、介護福祉士養成のための介護実習と社会福祉士養成のための社会福祉援助技術現場実習の実習施設指導者へ、今年度の介護実習と社会福祉援助技術現場実習の実習結果及び学生の学びについて報告し、次年度の実習計画に関し提案させていただきながら、施設実習指導者より実習への意見を伺い、次年度の実習に対してご理解とご協力をいただくことを目的としています。

今回、社会福祉援助技術現場実習施設の実習指導者10名、介護実習の指導者9名、教職員15名の参加をいただきました。今年度は、新型コロナウィルス感染症感染予防のため、福祉施設での実習が困難な状況もございましたが、実習施設の皆様のご協力をいただき、ICTを活用するなどの創意工夫で実習を行うことができました。初めての試みも多く、受け入れていただいた実習施設指導者様のご意見、新型コロナウィルス感染症禍にどのようにしたら施設実習ができるのかなど、次年度以降の実習の在り方を検討する多くのご意見をいただきました。その中で、今後、実習とICTオンラインを用いてのハイブリッド型実習の可能性についても提案がありました。

仙台大学では、スポーツを続けながら、介護福祉士国家試験受験資格や社会福祉士国家試験受験資格の他、養護教諭、保健体育教諭、特別支援学校教諭、福祉科教諭を目指す学生が多く学んでおります。様々な年代の人々に教育・医療・保健・福祉の各分野で健康にかかわる指導者を育成し地域の人々の健康に貢献できる人材育成を目指しています。学生が大学で学んだ仙台大学の強みや特徴を、ポストコロナの新しい時代に実習でも発揮できるよう支援していきたいと考えております。

<報告:健康福祉学科>

「日本コーチング学会」において、片岡悠妃講師らの研究チームが令和2年度日本 コーチング学会奨励賞を受賞

この度、3月7日(日)に行われた日本コーチング学会にて、片岡悠妃講師らの研究チームによる「大学女子バレーボールチームの体力トレーニングにおけるコーチングの省察的実践」の論文が、令和2年度日本コーチング学会奨励賞を受賞しました。

<片岡悠妃講師より>

コーチング学領域では、コーチや選手の学びに役立つ実践知を明らかにする研究が推進されているものの、これまでに、現場のリアリティーが反映される研究成果、いわば、指導者のコーチング活動そのものを科学的に研究した論文はありませんでした。この研究は、上記のような問題関心を捉えた筆者が、実際にコーチとして実践してきた参与観察記録に基づいて、コーチングの現場で発動する実践知を省察的に検討したものです。コーチが実際に実践してきたコーチング行動や思考とその変遷過程、現場において起きた出来事を詳細に記録したコーチング日誌の記載内容を定性的記述データとして質的に省察することで、初心者コーチが習得する、

もしくは所持しておくことが望ましい知見、技能、能力や適切な 行動の一端を、明らかにすることができました。

本研究が形にできたのも、共同研究の先生方、査読の先生方、研究に協力して下さったチームの皆様のおかげです。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

奨励賞を受賞し、私自身、一層身が引き締まる思いとなりました。まだまだ未熟者ですが、将来スポーツ指導現場で活躍したいとワクワクしている学生と共に、コーチングについて共に考え、学び、指導者養成に還元していきたいと思います。



表彰式・閉会式

日本コーチング学会からもっと見る

スの能美を自動再生

表彰式・閉合式

日本コーチング学会



仙台大学クリケットプロジェクト・2021練習会を開催

主催:仙台大学、日本クリケット協会

令和3年2月28日・3月1日の二日間、協会が契約したオーストラリア人のサイモン氏(日本代表ヘッドコーチ)並びに宮地氏(ジュニア普及コーディネーター)による練習会を実施しました。

男女を問わず現在の1・2・3年生に参加募集したところ、女子クリケット部員5名に加え女子1名・男子3名が参加しました。初日は午前ハンドボールコート・午後陸上グランドで、二日目はラグビー場で実施しました。運良く両日とも晴天で絶好のコンディションの中、極めて内容の濃い充実した練習会となりました。部員達のレベルアップは目を見張るものがありましたし、クリケット初体験の男子たちも大いに興味を持ってくれたようでした。今回の練習会を契機に、本学のクリケット部の発展につなげたいと願っています。教員は仲野・パランギが全体をサポートし、髙橋副学長も見学に来られました。また、二日目は撮影協力を依頼していたスポーツ情報マスメディア研究会の学生3名による部のPR動画撮影をしていただきました(感謝いたします)。

<学内の学生たちへ、参加募集のご案内>

クリケットプロジェクトを通じて国際大会で活躍するクリケット選手を目指しませんか?

日本クリケット代表を選考する一般社団法人日本クリケット協会と仙台大学が協働しクリケットプロジェクトを 2年前に立ち上げ、世界で活躍する日本代表などトップアスリートを育成しております。つきましては、今年新た に日本代表の選手及び仙台大学クリケット部の拡充を図るために練習会を仙台大学で開催します。クリケット歴が ない又は少ない方も対象となりますので、希望する方は仲野研究室までご連絡ください。

2021年のシーズンは、クリケット女子日本代表が国際クリケット評議会主催W杯予選サモア大会と東アジアカップ香港大会の2大会に出場します。代表選考基準はクリケットの技術はもちろん基礎体力などのアスリートとしての力が試されます、女子代表には比較的競技歴が少ない方も選ばれることもあり、ご自身の体力やクリケット以外での競技経験をもとにクリケットのスキルアップできます。男子代表では、ジュニア層の充実に伴い競争率が年々高くなっておりますが、ご自身のその他競技経験を活かすことが女子代表と同様に可能です。

仙台大学クリケットプロジェクトでは、日本代表選手を発掘し育成すること及びチャレンジを通じてトップアスリートの他、スポーツマネジメントや指導者のキャリア形成を支援する機会の提供を行っております。 <女子クリケット部・部長 仲野隆士>



練習会に参加した全員



陸上グランドでの指導場面



ハンドボールコート (テニスボール使用)



ラグビー場に専用マットを設置して



サイモン氏による技術指導場面



テニスボールを用いたバッティング練習



芝草通信 NO. 23

担当 : 体育施設管理コンサルタント 小島文雄

4月の芝生管理について

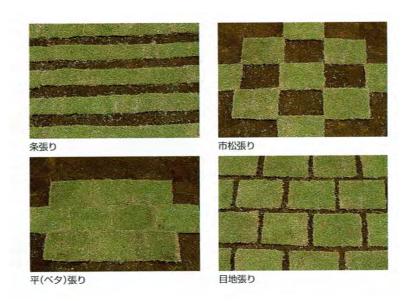
気温がまだ低いので、噴水周りの高麗芝生(暖地型日本芝生)と第二グラウンドバミューダグラス(暖地型洋芝)は 枯れ葉色となり生育が止まっています。第二グラウンドは4月になれば少しずつ緑色になります。噴水周りはそれよ り遅れて5月のゴールデンウイーク明けころから緑色になります。

【参照】月間維持管理については、Monthly Report Vol.164/2019.DEC から毎月掲載済み

春を迎え今回は家庭で楽しめる芝草の張り方を説明します。

1. 芝張りの仕方

芝張りの境界部分に白い4mm程度のポリプロピレンのひもを張ると真直ぐに植え付けることが出来ます。境界がはっきりして美しく仕上げられます。



1) 市松張り (いちまつばり)

一枚おきに市松模様に張ります。4月に張れば10月までには匍匐茎が芝生のない裸地の部分に伸びて行って、 節目から下に根を張り上には直立茎が伸びて芝生を造ります。また、地下で匍匐茎が絡み合うので、踏圧や擦り 切れに強い芝生を形成します。

2) 目地張り (めじばり)

芝生と芝生の間に3~5cmの隙間を開けてレンが積み模様にします。4月に張れば8月ころには全面が芝生で埋まります。

3) 条張り (すじばり)

芝生を $5\sim10$ c m幅に芝生を任意の長さに切り、5cm程度の隙間をあけて張ります。4月に張れば10月までには全面に芝生を形成します。

4) 平張り (ひらばり)

隙間なく全面に張ります。ベタ張り、詰め張りとも言います。芝生の間に隙間があると、目土や床土が雨で流されたり、雑草が発生します。予算の都合もあるでしょうが、できれば平張りをお勧めします。

2. 目土と水やり

芝生を張ったら、目地(苗と苗の間の隙間)を埋め、また芝生に適度な水分を維持させるために目土をします。 目土の量は、水やり後、芝生の葉が見える程度です。目土を行った後は、足で踏んで転圧し、それから水やりし、 水がいったん浸み込んだら再び水やりして水浸しになるまで繰り返します。水やりによって目土を芝生の根や茎の 間に落して葉を出してあげます。

3. 芝張り後の維持管理

芝生が根を出し地面に定着するまでの約1か月間が注意の必要な養生期間です。その間に芝生が乾かないように頻繁に水やりをします。また、植え付け1週間後に化成肥料 (N-P-k=10-10-10) などを40g/m2程度施します。

写真・参考文献: NHK趣味の園芸 (3月26日記)



| 川平キャンパスAT・S&Gレポート

「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 35

担当: 今野 桜 助手

仙台大学附属明成高校では3月3日に卒業式が行われ、私達川平ATRでもサポートしてきた多くの生徒達が巣立っていきました。今年の卒業生にとって高校生活最後の1年間はコロナウイルスの影響で多くの学校行事が中止になり、部活動も今まで通りの練習や大会ができない状態が続き、悔しい思いをした生徒が沢山いると思います。それでも部活の時間になると仲間と共に励ましあいながらスポーツを楽しんでいて、そんな彼らの姿を見ていて自分の方が勇気づけられた気がします。卒業後の進路はそれぞれ違っていますが、高校生活で学んだこと、経験したことを存分に活かして将来立派な大人になってほしいと思います。卒業生を送り出すと同時に、川平ATRでは新入生を迎え入れる準備を進めています。まずは新入生対象のフィジカルチェック「Freshman Entrance Screening (FES)」を通して一人一人の体の特徴を把握し、その結果をもとに起こりやすい怪我の予防や今後のトレーニングを行っていきます。年度初めは1年生の怪我が特に多く発生します。その中には、自分の体を知った上で普段から弱点克服のためのストレッチやトレーニングなどをしていれば防げた怪我も沢山あります。川平ATRではそういった怪我が少しでも減り、仙台大学附属明成高校の生徒たちが楽しく安全に充実した3年間を送れるように新学期からも活動してまいります。

令和2年度「最終講義」を開催



令和3年3月16日14:00~L C棟1階において令和2年度「最終講義」を開催しました。新型コロナ感染防止の観点から、対面方式での開催のほかオンライン(Google Meet)配信も同時並行で実施し学生・教職員80名が聴講しました。

最終講義は、本学で永きに亘り勤務された教員が定年退職する際行う講義で、退職教員への敬意を表し功績を称える記念行事として先生方のご意向を伺ったうえで実施しています。今年度は、遠藤保雄学長と学術会代表幹事の 柴原茂樹教授による最終講義を行いました。

朴澤理事長・学事顧問による開会のご挨拶後、講師紹介として最終講義を行うお二人の先生方の、これまでのご 経歴とご功績等を高崎健康福祉学科長と髙橋仁副学長から紹介いただきました。

柴原教授の「新型コロナウイルスからのメッセージ:知は力なり!」と題した最終講義では、ウイルス、遺伝情報の伝達のしくみ、新型コロナウイルスワクチンの特性など、酸素に魅了され生体色素が彩るストレス応答の研究に従事された柴原先生ならではの視点からユーモアを交え新型コロナウイルスとの共存を図るためのポイントなどが語られました。次に遠藤学長の「スポーツ経済の解剖学『スポーツ経済学』」と題した最終講義では、スポーツ経済学研究の新しい流れ、ビジネスに影響されるスポーツ、国民経済とスポーツ経済など、経済学の枠組みをいかにスポーツ経済に当てはめ分析していくか等を熱く語ってくださいました。

最終講義の終了後には花束贈呈が行われ、柴原教授には学生代表としてゼミ生の沖田さんと教職員代表の大山教授から、遠藤学長には学生代表として大学院生の高橋さんと教職員代表の山梨講師から、これまでのご指導や大学でのエピソードなど感謝の言葉が述べられ花束が手渡されました。その後写真撮影が行われ、和やかな雰囲気に包まれた最終講義となりました。

学生代表花束贈呈(柴原ゼミ:沖田さん、院生:髙橋さん)

教職員代表花束贈呈 (大山教授、山梨講師)

なお、退職なさる先生方から温かなメッセージをお寄せいただきましたので以下のとおりご紹介します。

「在職中の思い出」

副学長 青沼 一民

平成26年4月~令和3年3月までの7年間、仙台大学で勤務できましたこと大変うれしく思いますとともに感謝申し上げます。

昨年からコロナ禍での対応に追われる状況の中で、新たな生活様式が求められましたが、在職中の思い出として、教員養成に携わる機会をいただいたこと、また、国際交流の一環として中国、瀋陽師範大学と本大学との海外武道実習及び協定10周年記念行事として瀋陽師範大学での式典行事に参加したこと等、とても印象深く心に残っています。



私は、毎年「教職を志す」学生と接し、学生の大半が教職を目指して入学していますが、その動機に小・中・高校時代の教員の影響を強く受けたこと、教員の家庭で育てられ親の背中を見て影響を受けたこと、近隣の小・中学校等での学校支援ボランティア活動を通して児童生徒と接する中で影響を受けたこと等、実に様々な形で「志」を育んでいる学生と接してきました。

| これまで「教員」としての素養、知識・技能、モチベーション | アップのために自ら学修に取り組む姿から、現役で教員採用合格 | 及び過卒2年以内に合格する学生は、「志」を強く持って迷うこと | なく2年生後半~3年生前半までに積極的に学修に取り組み、毎日

コツコツと自分のペースで生活している学生と接し、このような学生こそ教員になって欲しいと願うと同時に、実現できて旅経つ姿を見送るのも嬉しい限りです。

合否の時期には、親のようにドキドキですが「合格」の結果を手に入れた瞬間に学生とともに努力が報われたものとして喜びを分かち合ったものです。これから学校現場で「教員」として働く重要性と資質を十分に身についているのかふと不安になりますが、そこは、本学の強みである体育系学生として集団行動、部活動で鍛えた組織的活動として十分身に付いているので大いに期待できるところで心配ないと思いました。

2018年9月23日~30日の間、中国瀋陽師範大学と本学との協定10周年記念式典に参加してまいりました。特に、10周年記念、陸上競技大会にゲストとして出席しましたが、驚きの連続で、本格的な観覧席も含めた陸上競技場の大きさに圧倒されました。開会行事が早朝7時には開始、各専門領域別学院の学生約1万人が入場行進を行い2日間の日程で各種競技に分かれて参加、競技中に体育主任の粋な計らいで理事長がスターターとして、私が入賞者のプレゼンターとして大役を仰せつかり貴重な体験をしました。更に、本学の実習学生や0Bの留学生が参加した100m,100m×4リレーで見事優勝し、多くの留学生から熱烈歓迎を受けていました。

瀋陽市を訪れて感じたことは、広大で起伏のない平坦な土地に高層住宅が乱立している状況から700万人が生活する大都市空間のスケールの大きさに驚くばかりでした。



最後になりますが、在職中大変お世話になりましたこと改めて御礼申し上げますとともに、今後、仙台大学の 益々のご発展をご祈念申し上げ御礼の言葉といたします。



「東日本大震災から新型コロナ禍」まで

教授 大内 悦夫

私がこの大学に勤務するようになったのは、平成23年4月。あの東日本大震災が発生した日から20日後でした。研究室は前任者の荷物を運び出すことが出来ず、4月いっぱいは自宅待機という状態から始まりました。この年は5月から講義が始まりましたが、講義以外に当時の学生は、私も引率しましたが、毎日、被災地の支援ボランティアに行って、様々な仕事をしていたのが印象的でした。

その後は、子ども学科の新設、創立50周年記念事業、本学の認証評価に対応することなど、今までは経験したことのない仕事を担当することが出来ました。

また、講義では、「教職実践演習」の立ち上げ、「教養数学」の新設が思い出に残ります。大学での仕事では、教育企画部長を7年務めさせて貰いましたが、現委員長の田中先生、平良先生をはじめ、歴代の委員長、委員の方々、そして最も仕事をして貰いました教育企画室の皆さんのおかげで何とか仕事ができたと思っており、この間、関係された皆様には心から感謝申し上げます。本学の組織は、一般的な組織とは異なり、その対応を誤ると部員そして教育企画室に迷惑をかけることになるので、それはないようにしたつもりですが、配慮が不足した点はご容赦願います。

退職が近づいた令和2年3月からは、新型コロナの影響により6月までの休講、そしてオンライン授業の実施となり、今までの教員生活では想像もしていなかった講義方法が導入されました。これには私のような年配の者にとって全く知識のない状態であったので、本当に参りましたと言うしかありません。

いずれに致しましても、本学での私の人生は、震災に始まってコロナで終わるということになりました。こんなこともあるのですね。

終わりに、仙台大学の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈りし、挨拶と致します。



「仙南の春よ、永遠なれ」

教授 大宮 勇雄

雪の蔵王に映える満開の桜。仙南の春はなんと美しいのでしょう。

地球が存続の危機にある今、この豊かな自然と穏やかな生活を次代に引き継いでいくことが私たちの務めだと、見るたびに思います。

話は変わりますが、イタリア・レッジョエミリア市は、世界の幼児教育のトップランナーとして著名です。その原点は何かと問われて、当時(1960年代)のボナッチ市長は、第二次世界大戦時のファシズム=戦争への痛切な反省であるとして、こう語りました。

「迎合し、従順に従う人々は危険であること、新しい社会を構築するにあたって、子どもたちにその教訓を伝えることと、子どもは自ら考え行動することができるという子ども観を育み、維持していくことが必要不可欠なのだと、ファシストの経験が教えてくれた」と。

「迎合する従順」とは、今はやりの「忖度」のことでしょう。自己保身のために権力におもねり、他者を踏みに じっても恥じることがないということです。そしてそれがはびこると、豊かな自然や暮らしが壊される、これが歴 史の教訓です。

大学が「研究という特権」を与えられているのはなぜでしょう。「忖度」以外の生き方があるんだよ、「既成」以外の社会がありえるんだよという「心のあそび」がなくては、人類は行き詰ってしまうという知恵から、ではないでしょうか。

仙台大学が「人間と身体に関わる知の府」として、いっそう輝き発展されることを心より祈念しております。



「5年間、お世話になりました」

教授 紀野國 宏明

私が仙台大学にお世話になったのは、ちょうど5年前です。それまで警察社会で生きてきた私が突如、大学の教師になりました。早いものであれからもう5年が経ちました。当時を少し振返ってみますと、本当に周囲の皆様のご指導やご協力のお陰で、どうにか仕事らしいことができたと改めて思います。この間、苦労したことも、また、とても嬉しいことも数えきれないほどありました。その中のいくつかを皆さんに紹介したいと思います。何より大変だったのは、やはり長年にわたり警察社会しか知らないで生きてきた私にとって新しい教育社会、取り分け大学という社会の文化を知り、これに馴染むということが大変でした。仕事の進め方やそのシステムの違いに戸惑うばかりで、その日その日を過ごすのがやっとの思いでした。一つ例を挙げれば、周囲の皆さんが当たり前に使用している言葉の意味が分からないのです。シラバス、導入演習等々、わからない言葉が飛び交う社会、今思えば笑い話のようですが、当時の私はまるで外国にでもきたような具合でした。

一方、嬉しかったことは、やはり、たくさんの学生と本気で触れ合うことができたことです。日々の学生との触れ合いは、時間とともに深化し、良いこともそうでないことも、どちらも絶対に忘れられない記憶となって私の中に定着しています。

正直に申し上げれば、以前の私は、やや人間に対する不信、特に若者に対する不信というようなものを持っていたように思います。そんな私が、お陰様で日々目の前で若者達が成長していく姿に触れ、それに感動する日々を送りました。今となり私は若者が大好きになりましたし、心から信頼するようにもなりました。学生のみんなからたくさんのことを教えられました。ありがとうございました。

このような素晴らしい5年という時間を与えてくれた仙台大学に心より感謝し、学生の皆さんへ心よりエールを送りたいと思います。



「今こそ、"Sports for All" |

教授 柴原 茂樹

平成28年度からの5年間、スポーツを奨励する仙台大学での教育という貴重な経験をすることができました。私は、「核」を持たない赤血球の代謝研究(ヘム分解)に従事してきましたが、「多核」の骨格筋細胞(筋細胞)にも興味を持っていました。すなわち、赤血球のヘモグロビンと筋細胞のミオグロビンはヘムを介して酸素を巧妙に取り扱います。さらに、収縮する筋肉は、種々生理活性物質(ミオカインなど)とエクソソーム(核酸とタンパク質などを含む微粒子)を分泌します。エクソソームは全身の臓器に作用し、各臓器の機能を促進します。運動が種々疾患を予防するという事実にも納得できます。

2020年3月11日、東日本大震災による犠牲者の9回目の命日に、世界保健機関(WHO)は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック(世界的大流行)を宣言しました。2020年に開催されるはずであった東京オリンピック・パラリンピックは延期され、COVID-19の猛威は今も続いています。コロナ禍での退職になるため、最終講義では新型コロナウイルス(プラス鎖1本鎖RNAウイルス)の繁栄戦略、人類の防御戦略としての多様性(個体差と性差)、そして救世主たるワクチンの概要を紹介しました。

鬱々としたコロナ禍の今こそ、スポーツを介した仙台大学の社会貢献が重要になります。また、革新的なmRNAワクチンが効果を発揮するには、筋細胞における抗原(スパイクタンパク)の産生と分解、そして免疫細胞への情報伝達(抗原呈示)が必須です。まさに筋細胞が世界を救おうとしています。しかし、ウイルスもしたたかですので、ワクチンの効果を過度に期待すべきではありません。

本学は、スポーツ科学に造詣が深い人材の育成に取り組んできました。コロナ禍の困難な状況においてこそ、仙台大学の真価が発揮されると期待しています。本学のさらなる発展を願っています。



「仙台大学の思い出」

准教授 武石 健哉

私は2007年に着任しました。授業、委員会活動では多くの教職員の皆様からお力添え頂きました。授業ではスポーツ実技系の先生方、コーチングコースの先生方、多くの先生方の学生へ対する熱い思いに触れることで、私も炎を燃やしておりました。この炎をさらに大きくしたこととして2019年ラグビーW杯日本開催が決まり、ラグビーを授業でも盛り上げよう、学生にラグビーの面白さを伝えようという意気込みのもと毎週水曜日は取り組み、NZからラグビーインターンシップで来ていたカンタベリー大の学生に授業へ参加してもらったことは忘れられない思い出です。

職員の皆様からサポート頂いたことで、委員会活動に取り組むことが出来ました。仕事に対する職員皆様の熱い思い、責任感に触れ、私もやらなければと何度も気を引き締め、なんとか業務を遂行出来たと感じております。

ラグビー専門の教員としてラグビー部監督も務めさせて頂きました。なかなか自分の形、やり方を見つけることが出来ずに過ごしていたように思います。学生指導で何度となく自分の力の無さを思い知らされ、人真似では学生に伝わらないと実感しつつ、トライ&エラーを繰り返し進んできました。部員へはいろいろ大変な思いをさせたんだろうなと思い返しています。

もうすぐ仙台大学での14年間を終えようとしています。出会った皆様、経験した出来事を自分の力にして前へ進む所存です。着任してから多くの皆様に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。 仙台大学の益々のご発展をご祈念申し上げます。

~ご退職なさる先生方、温かなメッセージをお寄せいただきありがとうございました~

<仙台大学学術会運営委員会>

